

## 平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 歯科専門医教育の指導者養成プログラム
機関名	: 徳島大学
主たる研究科・専攻等	: 口腔科学教育部・口腔科学専攻
取組実施担当者名	: 永田俊彦
キーワード	: 保存治療系歯学, 補綴理工系歯学, 外科系歯学, 矯正・小児系歯学, 歯周治療系歯学

## 1. 研究科・専攻の概要・目的

徳島大学大学院口腔科学教育部は、四国地方で唯一の歯学の大学院教育機関であり、地域の高齢者を対象としたフィールドワークから世界最先端の生命科学研究に至るまで、創造性豊かな幅広い研究を展開して国内外から高い評価を得ている。また、このような活動を通じて優秀な人材を育成し、社会貢献してきた実績がある。

昭和58年4月に歯学研究科（博士課程）が設置されて以来、歯科医学領域の教育、研究、臨床において指導的役割を担う人材の育成を目指して教育研究活動が行われてきた。また、平成16年4月には、徳島大学の医療系大学院である医学、歯学、薬学、栄養学の4研究科が統合し、ヘルスバイオサイエンス研究部（教員組織）が設置され、併せて歯学研究科（定員18名）は口腔科学教育部（定員26名）へと改組された。これにより専門分野に偏ることなく医療人として必要な幅広い知識を修得し、自立して研究活動を行う高度な研究能力と豊かな学識を備えた研究者養成のための教育基盤が形成された。

## 2. 教育プログラムの概要と特色

## (1) 背景

従来の口腔科学教育部の博士課程は主に基礎研究に重点が置かれたものであり、それによって国際的に優れた研究成果を上げてきたことも事実である。そんな中で、ともすれば大学院生の臨床教育や臨床研究は軽視されがちであったことは否定できない。一方、歯科医師臨床研修（平成18年度から卒後1年間必修化）修了後の専門臨床教育への接続性の担保、歯科専門医制度に対応した指導者養成ならびに教育システムの充実、ヒトを対象とした臨床研究の質の向上と科学的根拠に基づく歯科医療（Evidence Based Dentistry: EBD）の開発実践、等に関連した問題解決が喫緊の課題となっている。さらに、平成17年9月の中央教育審議会答申には臨床に特化した博士コースの必要性が明記され、医療系大学院レベル

での積極的な対応が求められている。これらを踏まえ、本プログラムが企画された。

## (2) 教育プログラムの当初の計画

本プログラムは、大学院博士課程における専門歯科臨床教育の実質化と国際化を図り、歯科医学に関する学術の理論および応用の教授研究を通じて、幅広い科学的基盤をもち、かつ専門性にも秀でた、歯学の教育・研究・臨床ならびに歯科行政などの分野で指導的役割を担う人材養成を目指すものである。本プログラムでは、臨床に特化した博士コースの設立を目指し、以下の3つの項目を当初の計画とした。

- ① 博士（臨床歯学）コースの新設による教育課程の実質化  
インプラント、矯正歯科、歯周病、顎機能異常、口腔外科等に関連した高度の専門性を有する最先端の歯科医療の診断・検査技法、評価、臨床疫学などに関連した国際的評価に堪える臨床研究を行う。
- ② 国際レベルの高度な臨床歯学教育プログラムの導入  
米国テキサス大学ヒューストン校をはじめとした海外の学術協定校との間に教員や学生の短期ならびに中長期滞在プログラムを設け、世界最先端の歯科医療に関する情報収集や、治療技術の修得を行う。また、成績評価や単位の修了認定等においては、海外の著名な臨床医、臨床研究者等を招き、客観性向上に努める。
- ③ 専門分野に応じた指導体制とカリキュラムの充実  
既存の講座・分野・診療科に縛られない、水平的かつ横断的な指導体制を確立し、専門医・臨床研究者の養成に必要な知識・技能を体系的に修得できるシステムを構築する。また、カリキュラム設定に際しては、その選択コース、定員

等に関して教育部内で十分吟味した上で、効率的な制度設計と運用を目指す。修了年限は4年とするが、成績優秀者には3年次での早期修了の機会を与える。

以上の計画のもとに歯科専門医教育の指導者養成プログラムを平成18年度および19年度の事業として実施した。

### (3) 事業終了後に期待された成果

- ① 教育プログラムの成果と大学院教育の実質化  
従来のコースでは十分といえなかった大学院レベルでの臨床歯学教育を充実させ、臨床歯科医に必要な高度な技能と医療人としてふさわしい態度を修得させるのに加えて、主として患者を対象とする臨床研究の遂行能力を修得させることが可能となる。さらに、学術交流協定校との連携機能を利用しながらグローバル・スタンダードに対応した専門教育を実践し、国際競争力のある、指導的な臨床歯科医の養成を目指した、高度な臨床歯学コースが実質化される。また、臨床研修修了者の大学離れに歯止めを掛けることが可能になる。
- ② 事業終了後の大学による自主的・恒常的な展開  
本プログラムは、徳島大学の中期目標・中期計画に基づくものであり、教育プログラムの実質化は格段に加速される。プログラム終了後は、学内外の各種競争的資金や共同研究費を調達しながら、時代の要請に基づく教育を展開する。

### (4) 本プログラムによって養成される人材像

- ① 臨床歯学の教育課程の実質化によって、高度な専門歯科医療の技術・知識を備えた歯科専門臨床領域の教育エキスパートの養成が可能になる。
- ② ヒトを対象とした臨床研究を活性化することで、明日の臨床に応用可能な研究成果が得られ、科学的根拠に基づく歯科医療（EDB）を開発する優れた臨床歯学研究者の養成が可能になる。
- ③ 国際的教育プログラムの導入によって、広い視野を有する国際基準に準じた臨床医の養成が可能になる。

### (5) 履修指導および研究指導のプロセス

図1に、履修指導および研究指導のプロセスを示す。

現在の博士（歯学・学術）コース（現定員26名、改組後13名；学位の種別は課程修了時に学生が自由に択一可能）に加えて、新たに博士（臨床歯学）コース（定員13名）を新設する。具体的には、インプラントコース、矯正歯科コース、歯周病コース、顎機能コース、口腔外科コース等）を設け、ヒトを対象とした歯科の臨床研究・臨床試験に関する教育研究の実践や国際的な臨床歯学教育プログラムの導入（海外の大学への学生・教員の派遣、国際シンポジウムの開催、著名な臨床医の招聘等）を図る。それに伴って現在の博士（歯学・学術）コースの定員は26名から13名に減員する。コースワークとして、1-2年次の「知の形成」と「知の探求」と並行した「技の修得」、引き続く3-4年次の「知と技の融合・昇華」から成っている。3-4年次には、研究・臨床で得られた成果を公聴会で発表し、論文審査には、国内外の査読システムを有する雑誌に論文1編の掲載ないし掲載決定済み証明が必要となる。

## 3. 教育プログラムの実施状況と成果

### (1) 教育プログラムの実施状況と成果

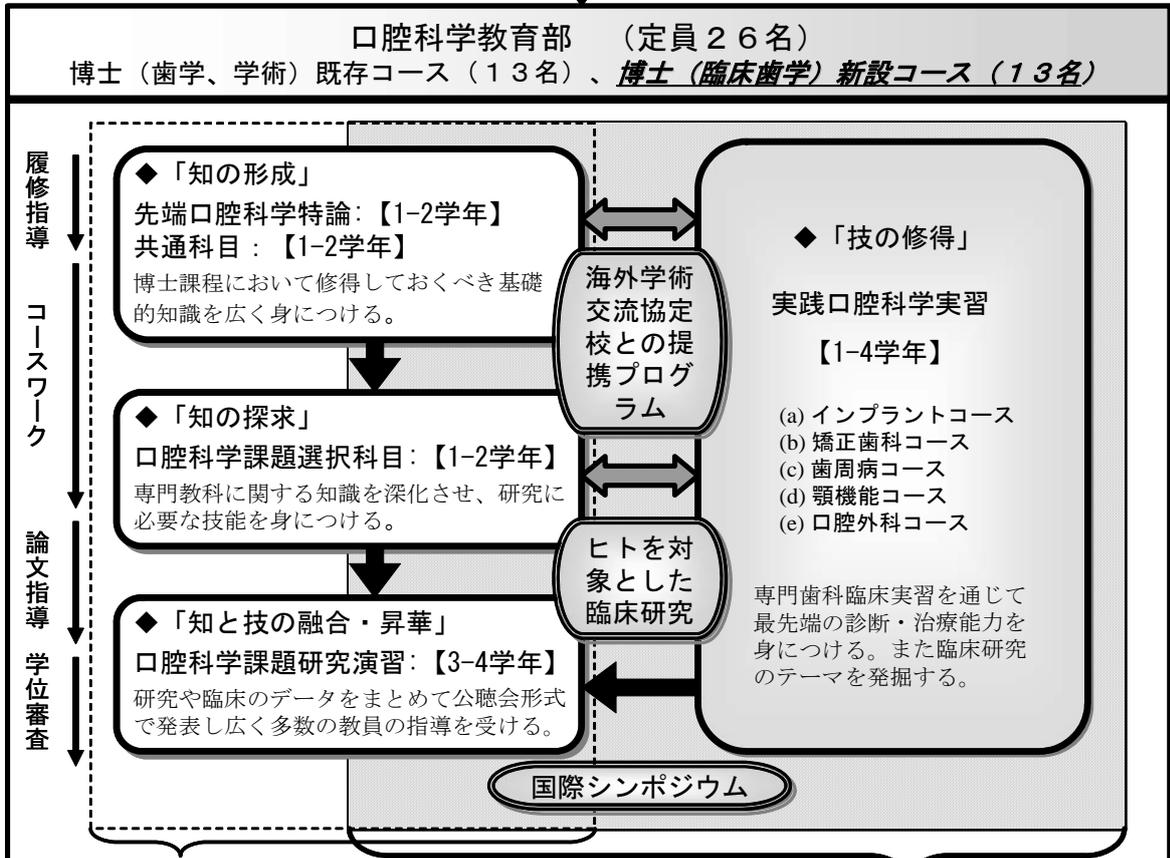
- ① 博士（臨床歯学）コースの新設による教育課程の実質化

平成19年度に10種類の臨床歯学模擬コースを立ち上げた。ほとんどの臨床教室が参画できるよう専門性を生かした模擬コースを設定し、対象は、臨床系教室に所属する大学院生のうち臨床研究あるいはそれに近い研究を行っている34名とした。各コース名と大学院生数は以下に示す通りである。口腔インプラントコース（4名）、高齢者歯科コース（3名）、矯正歯科コース（6名）、歯周病コース（6名）、顎機能コース（2名）、口腔外科コース（2名）、口腔癌専門コース（5名）、小児歯科コース（2名）、歯科麻酔コース（1名）、歯内療法コース（3名）、以上の10コース34名である。

口腔インプラントコースでは、インプラント治療の流れと実習項目を具体的に提示し、到達目標を明示してインプラントの材料、術式、禁忌症などについての講義および演習、実際のインプラント手術の介助などの臨床実習を行った。指導は、口腔インプラント専門医である市川教授（補綴科）および宮本教授（口腔外科）を中心に行われた。高齢者歯科コースでは、摂食・嚥下障害のある高

# 図1 履修指導および研究指導プロセス

一般学生（歯科医師臨床研修修了者）、社会人、外国人留学生



博士（歯学・学術）コース（既存）26名→13名

**博士（臨床歯学）コース（新設）0名→13名**

◆目標：博士課程における専門歯科臨床教育の実質化と国際化を図る。

◆特色：

- 1) 専門歯科臨床教育に特化したコースの設置。（インプラント、矯正歯科、歯周病、顎機能、口腔外科）
- 2) ヒトを対象とした歯科の臨床研究・臨床試験に関する教育研究の活性化。
- 3) 国際レベルの高度な臨床歯学教育プログラムを導入。（海外の大学への学生・教員の派遣、国際シンポジウムの開催、著名な臨床医の招聘等）

**養成される人材像**

- ・ 高度な専門歯科臨床の技術・知識を備えた優秀な**歯科専門医教育の指導者**
- ・ 科学的根拠に基づく歯科医療 (EBD) を開発研究する優れた**臨床歯学研究者**

高齢者歯科治療に関する教育および臨床実習に焦点が絞られ、「高齢者の摂食・嚥下障害の診断と治療」、「高齢者の口腔衛生に関する研究」などテーマで講義や演習が行われ、上記障害のある高齢者の歯科治療を実際に担当（介助を含む）させた。指導は、老年歯科医学会指導医の市川教授（補綴科）が主に担当した。

矯正歯科コースでは、コースワークのほとんどが治療経験をベースとした技能教育内容であり、永久歯列期の矯正治療 10 症例、混合歯列期の矯正治療 3-5 症例、診断 10 症例以上、装置の作成と装着 15 例以上などが設定された。指導は、矯正専門医である大場准教授らによって行われた。

歯周病コースでは、歯周外科手術の技能教育および糖尿病などの全身疾患を有する患者の歯周病治療の診断と治療に関する臨床での実習を主体に行った。また、糖尿病と歯周病の関連についての文献抄読も行い、本コースにおける臨床研究として具体的にどのようなテーマが立ち上げられるかについて演習も行った。指導は、歯周病専門医である永田教授および木戸准教授が主に担当した。

顎機能コースでは、到達目標として「顎関節症の診断と治療ができる」、「睡眠時無呼吸症候群患者への歯科的対応ができる」など 7 項目を掲げ、臨床では上記患者の歯科治療における介助を通じたコースワークを通じて、顎関節症の臨床知見を深めることを目的とした。指導は、顎関節症学会指導医である坂東教授（補綴科）と中野教授（顎関節症外来）が担当した。

口腔外科コースでは、外来における検査・診断レポートや手術見学レポートなどに加え、技能面では執刀手術症例として、埋伏歯の抜歯、口腔内消炎手術、嚢胞摘出術などの症例経験が課され、筆頭著者としての学会発表も履修項目に含まれた。指導は、口腔外科専門医である長山教授と宮本教授が中心となって行われた。

口腔癌専門コースでは、外来での診断実習に加えて病棟での入院管理症例レポート 10 例や化学療法実施レポート 10 例が課された。舌癌や上顎癌など手術室での手術介助も重要な履修項目として上げられた。指導は、口腔外科コースと同様に長山教授と宮本教授が担当した。

小児歯科コースでは、小児のう蝕処置、咬合誘導、外傷歯などの歯科処置を小児の成長発育を考慮して行える技術を修得することが目標であり、それに対応した到達目標が設定された。また、障害者の歯科治療についての履修項目もあり専門性の高い内容が提示された。指導は、小児歯科専門医である三留教授と有田准教授が主に担当した。

歯科麻酔コースでは、口腔外科手術時の全身麻酔、歯科外来診療時における精神鎮静法の修得、術前診断などを通じて、歯科治療患者の全身状態を見極める技能を習得しなければならない。臨床においては、歯科治療に恐怖心をもった患者や嘔吐反射の強い患者、心身障害者の歯科治療中の救急処置などに対応できる技能を習得することも履修項目として上げられた。指導は、歯科麻酔専門医である中條教授と富岡准教授を中心に行われた。

歯内療法コースでは、外科的歯内療法が行えること、難治性根尖性歯周炎へ対応できること、歯根破折へ対応できることなどが、専門的項目として掲げられ、実際の歯内療法症例を年間 10 症例以上受け持つとともに、国際学会での発表も積極的に行うよう指導した。指導は、歯科保存治療指導医である松尾教授と永田教授を中心に行われた。

以上に示した 10 コースにおいて、臨床系教室の大学院生が外来診断や手術を経験することによって、従来の大学院での研究様式に加え、技能教育という面からの大学院教育の内容が追加されたものと評価できた。また、それらの臨床成果を学会発表させたコースがいくつかあり、部分的ではあるが知と技の融合において顕在化したアウトプットが得られ、とくに国際学会における発表は大学院生を勇気づける材料になったものと考えられる。一方、ヒトを対象とした研究は、多くの教室でチャレンジが始まっているが、2年間のイニシアティブ事業の中で、明らかな研究成果が出る段階までは至っておらず、さらなる 2 年間で優れた臨床研究が展開されることが期待される。

## ② 国際レベルの高度な臨床歯学教育プログラムの導入

国際レベルの高度な臨床歯学教育プログラムを構築するためには、臨床力・研究力・教育力を備

えた個々の教員の実力アップが重要であり、本イニシアティブ事業においては国際シンポジウムにおける世界各国からの招待講演者による臨床歯科教育事情の紹介と討論、さらに臨床歯学に関するFDの推進に取り組んだ。

第1回国際シンポジウム(図2)では、ミシガン大学・Bayne教授から「2010年に向けた大学院歯学教育」、東京医科歯科大学・黒田名誉教授から「21世紀の口腔科学が進む方向」、ソウル大学・Nahm教授から「韓国ソウル大学歯学部における大卒者向け歯学教育課程」、キングスカレッジロンドン病院Odell教授から「イギリスにおける歯学教育の未来」についての講演が行われ、それらの発表を参考にしつつ、今後の日本における臨床歯学教育のあり方について活発なディスカッションが交わされた。その中で、国際的に通用する臨床歯学の必要性やe-learningを多用することによる教育効果の期待などが強調された。また、教員と大学院生が参加したFDワークショップにおいては、現在の大学院におけるカリキュラムについて取り上げられ、何が問題点なのか等について追求することにより、教員も大学院生も大学院教育に関する認識がおおいに深まった。第2回国際シンポジウム(図3)においては、(株)技能技術教育研究所・森代表取締役から「技術教育の視点と歯科医学教育」についてのFD教育講演が行われ、臨床歯学における技能の伝授という観点からの教育手法が提案された。

平成19年度には、徳島大学学術交流・海外拠点校の一つであるテキサス大学ヒューストン校から歯学部教員2名(Dr. Ridall & Dr. Gonzalez)を招聘し、徳島大学歯学部内において「テキサス大学インプラントセミナー」が開催された。対象は、大学院生、学部学生、研修医あわせて10名であり、本学の教員もインストラクターとして参加し、マンツーマン指導による講義と実習が2日間にわたって行われ、口腔インプラント学という新しい分野の臨床教育プログラムを促進するための研修が行われた。なお、セミナーはすべて英語で行われた。

③ 専門分野に応じた指導体制とカリキュラムの充実

図2 第1回国際シンポジウム

平成18年度 文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「歯科専門医教育の指導者養成プログラム」

第1回国際シンポジウム・FDワークショップ  
「21世紀の口腔科学が目指すべき方向性」  
The 1st International Symposium and Workshop on  
"The Future Direction of Oral Sciences in The 21st Century"

日時：平成19年3月2日(金)・3日(土)  
March 2 (Friday)・3 (Saturday), 2007

会場：兵庫県立 淡路夢舞台国際会議場  
Awa! Yatai Hall International Conference Hall, Hyogo, Japan  
URL: <http://www.gsos.tokushima-u.ac.jp/>

Organizer  
徳島大学大学院口腔科学教育部  
The Graduate School of Oral Sciences, Tokushima University, Japan  
口腔科学教育部長 坂東 圭一  
Dean, Director, Oral Science, D.D.S., Ph.D.

企画内容 / Plan of Events

3月2日(金)・3日(土) March 2(Fri)・3(Sat)	シンポジウム Symposium
3月2日(金) March 2(Fri)	招待講演者 Invited Speakers ポスターセッション Poster session
3月3日(土) March 3(Sat)	FDワークショップ FD Workshop 徳島大学教員 大学院生 Faculties and Students

招待講演者 / Invited Speakers (Alphabetical order)

Stephen C Bayne, Ph.D. University of Michigan, U.S.A.	Mark C Herzberg, D.D.S., Ph.D. University of Minnesota, USA	Doong-Seok Nahm, D.D.S., Ph.D. Seoul National University, Korea	Edward W Odell, Ph.D., F.R.C.P.(Path), King's College London/Guy's Hospital, UK
Takayuki Kuroda, D.D.S., Ph.D. Tokyo Medical and Dental University, Japan	Francesca Miotti, M.D., D.D.S., M.Sc. The University of Padua, Italy	Toohiyuki Tanaka, D.D.S., Ph.D. Osaka University, Japan	

参加申込み・お問い合わせ  
徳島大学大学院口腔科学教育部  
〒770-8504 徳島県徳島市三好1-16-15  
TEL: 088-633-7303 FAX: 088-631-4215  
E-mail: [isygakumu2k@f.tokushima-u.ac.jp](mailto:isygakumu2k@f.tokushima-u.ac.jp)

図3 第2回国際シンポジウム

平成19年度 文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「歯科専門医教育の指導者養成プログラム」

第2回 国際シンポジウム  
21世紀の口腔科学が目指すべき方向性  
-全身の健康を担うオーラルサイエンス-  
The 2nd International Symposium on  
"The Future Direction of Oral Sciences in the 21st Century"  
-Oral Sciences for Keeping Our Healthy Life-

日時：平成19年12月8日(土)  
会場：徳島大学長井記念ホール・歯学部

Information of Events  
December 8(Sat), 2007

●Symposium  
●FD Lecture  
●Oral & Poster sessions  
(Award Competition)

Invited Speakers

William J Schwartz, M.D., Ph.D. Professor, University of Massachusetts Medical School, U.S.A.	Marc D McKee, Ph.D. Professor, Faculty of Dentistry, McGill University, Canada	Isao Ishikawa, D.D.S., Ph.D. Visiting Professor, Tokyo Women's Medical University, Japan	Shinya Murakami, D.D.S., Ph.D. Professor, Graduate School of Dentistry, Osaka University, Japan
Paul H Krebsbach, D.D.S., Ph.D. Professor, School of Dentistry, University of Michigan, U.S.A.	Toshihisa Kawai, D.D.S., Ph.D. Associate Professor, Harvard School of Dental Medicine, U.S.A.	Kazuo Mori, Ph.D. President, Laboratory of Skill/Technology Education, Japan	

主催  
徳島大学大学院口腔科学教育部  
The University of Tokushima Graduate School of  
Oral Sciences, Tokushima, Japan  
口腔科学教育部長 長井 敬  
Dean, Director, Tokushima Nagata, D.D.S., Ph.D.

英語講演 口頭ポスター発表を募集します。  
平成19年12月8日(土)まで、英語(口頭)・英語(ポスター)発表の応募を募集します。  
詳細は、本学大学院口腔科学教育部(〒770-8504 徳島県徳島市三好1-16-15)に問い合わせください。  
TEL: 088-633-7303 FAX: 088-631-4215  
E-mail: [isygakumu2k@f.tokushima-u.ac.jp](mailto:isygakumu2k@f.tokushima-u.ac.jp)

設定した10の模擬コースにおいて、個々の専門分野に沿った教育内容が提示された。どのコースにおいても技能教育を取り入れたカリキュラム内容が組み込まれ、インプラントコースでの、テキサス大学インプラントセミナー実習や実際のイン

プラント手術の介助，矯正歯科コースでの実際の患者さんの矯正装置作成と臨床介助，歯周病コースでの歯周組織再生療法の治験症例の介助，口腔癌専門コースでの手術介助，歯科麻酔コースでの血管確保や気管挿管などが特徴的な技能教育カリキュラムとして上げられた。これらは，各コースの専門医によりマンツーマン指導が行われ，中身の濃い実習となった。

以上のコースワークを通じて，歯科専門医養成のための基礎を大学院口腔科学教育部として組織的に立ち上げることができた。

## (2) 社会への情報提供

第1回国際シンポジウムの内容が，平成19年3月3日の徳島新聞朝刊(図4)に掲載された。「臨床歯学教育先端事例学ぶ・淡路で国際シンポ・徳島大学大学院」という見出しで，イニシアティブの様子が写真入りで紹介され，本イニシアティブの目的や主旨が報道された。また，このような事業を展開していることを徳島大学歯学部学生や徳島県内の開業歯科医師に情報発信すると同時に，大学院臨床歯学コースの必要性についてアンケートを行った。その結果，回答が得られた251名(学生139名，開業歯科医師112名)のうち，本コースに興味があると答えた者は201名であり，専門医を取得したいと答えた者175名，本コースに入学したいと答えた者57名であった。コース別ではインプラントコースに興味を示す者が一番多く(115名)，続いて歯周病コース(95名)，矯正歯科コース(62名)の順であった。

## 4. 将来展望と課題

### (1) 今後の課題と改善のための方策

本事業が採択された時点で幾つかの留意事項が指摘され，その項目への対応が今後の課題および方策につながっていくものと考えられる。博士(臨床歯学)という学位については，前例が少なく，学位の国際通用性や他の学位との相互関係等も踏まえつつ，さらに慎重に検討する必要がある。今後の事業では，従来の博士(歯学)からスタートし，実績を積んだ時点で博士(臨床歯学)をアピールしていく計画である。また，個々の科目の単位設定に関しては不十分な点も多く，今後詳細に検討していく計画である。次に，大学院教育におけるFDの実施体制が

十分整備されていないことを当初に指摘されていたが，平成20年度より徳島大学では全学的にFD事業を盛り上げるために，全学及び各部局でFD委員会が正式に立ち上がった。歯学部でも学部大学院を含めたFD委員会が設置され，7名の委員による活動が始まっている。

また，「徳島大学のような研究者養成機関においては，実践的研究者のみならず基礎研究者の育成が期待されている。この両面のバランス良い発展に，より深く配慮することが望まれる」との指摘を受けたことから，本イニシアティブ事業では，基礎系研究に携わっている大学院生もエンカレッジできるよう，本事業の一部である「研究の国際化」に参画してもらい，質の高い研究を実践していることをアピールしてもらった。今後は，従来からの「歯学コース」と新たな「臨床歯学コース」がそれぞれの特徴を出しながら，いずれのコースからも国際的に優れた業績が出せるようなシステム作りと人材育成を行わなければならない。

### (2) 平成20年度以降の実施計画

現在，口腔科学教育部では大学院臨床歯学コースを概算要求項目として準備している。この計画は，医歯薬キャンパスでの大学院改革との整合性に合わせる形で大学全体の組織改革の一部として，平成22年度の概算要求項目に盛り込まれる予定である。また，2回の国際シンポジウムが好評であったことから，平成20年度も国際シンポジウムを開催することとし，招待講演，国際交流講演，若手研究者講演，大学院生の発表(コンペティション)などを含み，すべて英語バージョンで行う集会を学内予算で平成20年9月6日に開催することとした。以上の計画が歯学部学生から魅力ある大学院として評価され，前向きな大学院生が全国から集まってくることを期待している。

図4 国際シンポジウム新聞記事(平成19年3月3日(土))



先端の臨床教育について講演する  
米国研究者―兵庫県淡路市の県立  
淡路夢舞台国際会議場

## 臨床歯学教育 先端事例学ぶ

### 淡路で国際シンポ

**徳島大大学院**

臨床歯学教育に力を入れている徳島大学大学院口腔科学教育部は二日、兵庫淡路市の県立淡路夢舞台国際会議場で「二十一世紀の口腔科学が目指すべき方向性」と題する第一回国際シンポジウムを開き、先端臨床教育を行う米国研究者らの講演や徳島大大学院生らによる研究報告を行った。三日にも英国や韓国の研究者が講演し、午後はワー

クシヨップで今後の大学院教育を話し合う。この日のシンポジウムには徳島や大阪、広島、福岡の研究者や徳島大の大学院生ら約百六十人が出席。国際歯科研究学会のステファン・ペイン米國ミシガン大学教授や同学会の前会長・黒田敬之東京医科歯科大学名誉教授らが講演した。ペイン会長はeラーニングを多用することで臨床経験を増やしたミシガン大学の例を紹介した。

歯学教育をめぐるっては、日本の臨床教育の遅れが指摘されており、徳島大学は対策として今年度に「歯科専門医教育の指導者養成プログラム」を計画。このプログラムは、文部科学省が優れた大学院教育を重点的に財政支援する「魅力ある大学院教育イニシアチブ」に選ばれている。

徳島大大学院の坂東 永一口腔科学教育部長は「こうしたシンポジウムなどを通し、海外の先端的な例を参考に臨床教育に力を入れたい」と意欲を見せていた。

## 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における評価

## 【総合評価】

- 目的は十分に達成された
- 目的はほぼ達成された
- 目的はある程度達成された
- 目的は十分には達成されていない

## 〔実施（達成）状況に関するコメント〕

教育・研究・臨床ならびに歯科行政などの分野で指導的役割を担う人材を養成するという目的に沿って、博士（臨床歯学）コースを新設し、技の習得として実習を組み込んだプログラムや分野横断的な研究指導を実践するなど、着実に計画は実施された。また、臨床系大学院における専門医養成という問題を提起し、臨床技能と臨床研究能力の両立を目指す取組を具体化したことの波及効果は評価できる。

情報提供については、シンポジウム開催やホームページによる各コースの活動報告の公表により着実に行われている。

今後は、海外の学術協定校への学生・教員の派遣に対する経済的基盤についての見通しを明確化し、自主的・恒常的な展開を図ることが望まれる。

## （優れた点）

- ・臨床研究活性化を目指した新しい博士（臨床歯学）コースを設置し、臨床系大学院の在り方を専門医養成の方向で具体的に示したことは評価できる。

## （改善を要する点）

- ・各学会の専門医養成コースとの整合性に配慮する必要がある。
- ・今後の継続的な取組による臨床研究への展開に向けた方策を具体化することが必要である。